

# 京都橋大学 地域連携センター

つながる Vol.7

# つながる

## CONTENTS

### 第4回橋セッション

#### 山科区老人クラブ連合会に支えられた看護学部… そしてこれからの10年

- 河原 宣子 本学看護学部教授  
中川 良雄 山科区老人クラブ連合会奉仕委員会副委員長  
土田 絹枝 山科区老人クラブ連合会副会長、女性委員  
太田 靖子 山科区老人クラブ連合会女性委員会委員長  
神井 壽治 山科区老人クラブ連合会奉仕委員、前奉仕委員長  
岡田 宏美 山科区老人クラブ連合会若手委員会副委員長  
堀 妙子 本学看護異文化交流・社会連携推進センター長、  
看護学部教授  
小野塚 元子 本学看護学部専任講師  
遠藤 俊子 本学看護学部長

### 第5回橋セッション

#### 地域連携センター「醍醐中山団地分室」 開設記念ミニシンポジウム

- 河股 智矩 関西大学大学院理工学研究科環境都市工学専攻  
建築学分野博士課程前期課程2回生  
塚原 健司 関西大学大学院理工学研究科環境都市工学専攻  
建築学分野博士課程前期課程2回生  
福岡 航 関西大学大学院理工学研究科環境都市工学専攻  
建築学分野博士課程前期課程2回生  
小林 大祐 京都文教大学総合社会学部専任講師  
都築 晃 藤田保健衛生大学医療科学部講師  
地域包括ケア中核センター担当  
篠原 誠一郎 京都市都市計画局住宅室住宅管理課担当課長補佐  
武藤 賢吾 本学学術振興課長

### 京都モダニズム建築を訪ねて 第17回

#### 京都市立日吉ヶ丘高等学校

- 河野 良平 本学現代ビジネス学部准教授

### Interview ともに 第7回

#### 「山科砥之粉」は伝統産業の縁の下のチカラ持ち 国内唯一の砥之粉づくりを次世代に手渡したい

- 進藤 謙二 株式会社進藤謙商店代表取締役



## 第4回橘セッション

# 山科区老人クラブ連合会に 支えられた看護学部… そしてこれからの10年

### 報告Ⅰ

河原 宣子 Kawahara, Noriko

本学看護学部教授

### 座談会

中川 良雄 Nakagawa, Yoshio

山科区老人クラブ連合会奉仕委員会副委員長

土田 絹枝 Tsuchida, Kinue

山科区老人クラブ連合会副会長、女性委員

太田 靖子 Ota, Yasuko

山科区老人クラブ連合会女性委員会委員長

神井 壽治 Kamii, Toshiharu

山科区老人クラブ連合会奉仕委員、前奉仕委員長

岡田 宏美 Okada, Hiromi

山科区老人クラブ連合会若手委員会副委員長

堀 妙子 Hori, Taeko

本学看護異文化交流・社会連携推進センター長、看護学部教授

小野塚 元子 Onozuka, Motoko

本学看護学部専任講師

### 報告Ⅱ

遠藤 俊子 Endo, Toshiko

本学看護学部長

### 総合司会 & コーディネーター

松本 賢哉 Matsumoto, Kenya

本学看護学部准教授

2014年12月24日、本学明優館にて地域との連携・交流企画「第4回橘セッション」が開催された。このイベントは、本学の地域連携センターが、地域社会や地方自治体・企業・NPO法人等との連携・交流をいっそう発展・促進することを目的として企画したもので、第4回目となる今回は、「山科区老人クラブ連合会に支えられた看護学部…そしてこれからの10年」をテーマに、座談会と2本の報告が行われた。

第2部の懇親会（於：本学クリスタルカフェ）は、クリスマスパーティーを兼ねて、老人クラブの日頃の労をねぎらう場となり、終始、感謝の気持ちに包まれた。

### ■報告Ⅰ

## 「老人クラブとの連携の概要」

河原 宣子（本学看護学部教授）

本学においては、看護学部を設置する以前から、現代ビジネス学部を中心に地域との連携に積極的に取り組んできた。看護学部も、人によりそう看護職を地域のみならずと力を合わせて育てたいと考え、2007年頃から山科区老人クラブ連合会との連携を始めた。

そのひとつは、1回生の「ライフサイクル論実習」の一環として、老人クラブの美化ウォーキングに参加させてもらうこと。

2～3回生は、「プライマリファミリー実習」のなかで、女性委員の方による独居高齢者の家庭訪問に同行して、生活の実際を見せていただくとともに、本学体育館にもお越しいただき体力測定を行っている。また演習では模擬患者役をお願いして、ご指導いただいている。学生は、これらを通じて大きな学びを得て、臨地実習に出ていく。

4回生は、「健康教室」を開き、あくまで学生のレベルの範囲ではあるが、健康づくりの留意点などについて実技もまじえながら楽しくお伝えしている。このように4年間を通じて、学生は地域で生活する人々の思いやぐらしの実際を学ぶ機会を得ている。

看護学部の教員は、学生に対して、こうして地域の方々から得た学びを、看護という視点から頭にも身体にも心にも深く刻みつけて、本当の意味で地域の方々によりそう看護職に育ててほしいと願っている。

他大学の看護学部で教える知人は異口同音に、これほ

ど老人クラブと連携している大学はないと評価するし、私たちがそう自負している。今後も、老人クラブをはじめ地域のみなさんと力を合わせて、未来の看護職を育てたいと考えているので、よろしくお願ひしたい。

## ■座談会

### 「語ろう、たちばなの看護教育」

#### ライフサイクル論実習について

まず堀教授から、「ライフサイクル論実習」の美化ウォーキングについて「老人クラブの方々と一緒に、山科区役所から山科中央公園までを3コースに分かれて歩きながらゴミを拾うなかで、高齢者とのコミュニケーションに慣れることを目的としている」と説明し、「学生は、年配の人と接することに不慣れで、最初は緊張気味だが、『お年寄りは思っていたよりも元気で、私のほうが後からついていく感じだった』『家に帰ったら自分の祖父母と話してみようと思う』といった感想を寄せている。自分とは異なる年代の人と話す機会を持てたことが、とてもよい経験になっているようだ」と、成果を述べた。

小野塚専任講師は、美化ウォーキングの実習記録から、「お年寄りにどう声をかけていいのかわからず戸惑った」「聞きたいことが聞けない」「もっと積極的に行動し、主体的に学ばなければいけないと思った」「看護職は人とのコミュニケーションが大事だと再認識した」といった学生の感想を紹介し、美化ウォーキングが貴重な学びの場となっていると述べた。また、実習に入る前に、高齢者を理解するために、装具を使って高齢者の擬似体験をするが、美化ウォーキングを通してより深い学びにつながることも報告した。

老人クラブのパネラーからは、「対話をするうちに、だんだん学生を身近に感じるようになった」「今後も美化ウォーキングが学生の成長に役立てばうれしい」との感想が出され、今後の改善点としては、「学生も高齢者のグループに分かれて参加したほうが、より話がはずみ、交流が深まるのではないか」「例年、敬老の日の9月15日から1週間の間に実施しているが、土曜日・日曜日に実施すると、学生が参加するのは難しいかもしれないので、今後は平日に実施したい」といった意見が出された。

これに対して、小野塚専任講師は「来年からはスタート地点の山科区役所から、学生を分けて参加させたい。私も教員として美化ウォーキングに4回参加しているが、最初は老人クラブの方々が学生に話しかけることを戸惑っておられたような気がする。しかし、年々、みなさんから話しかけられることが増え、学生も会話のきっかけをもらうことでスムーズに関わりを持つことができた。学生がずいぶん助けられていることを、私も強く実感している。学生はまだ未熟な若者なので、そうした援助はたいへんありがたい」と述べた。

堀教授は、美化ウォーキングで学生が聞かせてもらう話の内容として、健康づくりの秘訣や山科の歴史に加えて、戦争体験を挙げた。老人クラブの方から戦中の生活の様子を聞かせてもらうなかで、山科の歴史や地域の成り立ちに関心を持つ学生も生まれていることを紹介し、「人生の大先輩からさまざまな経験や知識を吸収している」と、美化ウォーキングの成果を強調した。

#### プライマリケア実習について

##### ①体力測定と健康教育

小野塚専任講師から、老人クラブとの連携で実施している実習は2回生の体力測定と4回生の健康教育であること、体力測定は老人クラブとの共催で、今年で3回目となること、文部科学省の新体力テストの項目をもとに、高齢者のくらしやすさに必要な項目を加え、学生が正しく測定できる項目で実施していること、参加者は毎年連続して参加する人が約5割を占めていること、学生はリラックスして血圧を測る方法を事前に学んでから体力測定に臨むことなどが報告された。

健康教育についても、学生は参加者とのやり取りを通して、高齢者が食事・運動・睡眠で気をつけていることなどを具体的に教えられ、その健康意識の高さに驚くとともに、その言葉を重く受けとめていることが紹介された。

堀教授は、「将来、看護職として働くうえで、人がどのように生活しているのかということに関心を持つことが重要になる。その意味で、高齢者と直接やり取りできる健康教育は、学生にとって重要な体験になっていると思う」と述べた。

小野塚専任講師の「今後に向けて、要望があれば出してほしい」との呼びかけに応じて、パネラーからは「体力測定は、今年は午前・午後の2部制にした。参加者

が減らないかと心配したが、定員以上の参加を得ることができた。今後も早くから準備を始めたい」との発言があった。

会場からも「体力測定は、以前は府立医科大学や京都薬科大学の協力で実施していたが、府立医大はデータ分析とその返却・説明、薬科大学は薬の相談コーナーの設置というふうに、各大学の特徴が出ていた。京都橋大学の場合は看護学部なのだから、看護の相談コーナーがあればいいと思う。看護に関する相談窓口がほしい」「就寝・起床時間、食生活などについて、高齢者が話すだけでなく、学生から質問してほしい」などの要望が出された。

これに対して、小野塚専任講師は「体力測定の結果をどう評価するかについては、全国平均値よりも、むしろ連続参加することによって前年との比較検討の指標を得ることが大切だと考えている。そうすることによって日常生活を営む能力や機能の衰えを防ぐことができるので、ぜひ毎年受けていただきたい。看護の相談コーナーについても、みなさんの健康維持につながるようなかたちで考えたい。また、お話をうかがうばかりではなく、学生からもきちんと質問できるように促していきたい」と述べた。

## ②家庭訪問について

小野塚専任講師から、老人クラブの互助活動として「友愛訪問」というかたちで、女性委員が単身高齢者を家庭訪問していること、2010年から看護学部のプライマリケア実習の中の「プライマリファミリー実習」の一環として学生が女性委員に同行して、ふだんの生活状態、健康や病気の状況、近所付き合いなどについて話を聞かせてもらっていること、現在は年2回実施していること、などを報告した。

女性委員のパネラーからは、「仲間づくりを目標にして、学生と一緒に訪問している」との報告があり、「高齢者を孤立させないで、仲間としてつながろう」という、家庭訪問の目的が紹介された。「なかには、お風呂・トイレ・寝室などを見せてほしいと言う学生もいるが、見せてもいいのか」という質問も出された。

これに対して小野塚専任講師は、「訪問を通して、高齢者のくらしの実際を知ってほしいと思っているので、学生にも『もし可能であれば、ご本人の許可を得たうえで、見てきてほしい』と話している。見せたくない人もいると思うので、協力していただける範囲で十分だが、

生活の場のありのままを見せてもらうのは貴重な経験になる」と答えた。

また、「ひとりぐらしの高齢者は、若い人が来てくれるとうれしくて、つい話が長くなる。その反面、学生から話しかけることは少ないような気がするが、家庭訪問の時間制限はあるのか」との質問に対して、小野塚専任講師は「学生は、事前に担当教員との間で質問項目を確認してから、家庭訪問に同行する。まだ2回生であり、学生間のコミュニケーション能力の差が大きいので、それを考慮しながらグループ編成をしているが、不十分な点もあると思う。女性委員から話の水を向けてもらいながら質問している、という報告も聞いているので、今後はもっとコミュニケーションがとれるように事前準備を強化したい。訪問時間については、長居をすると高齢者が疲れるので、長くても1時間までと伝えている。話を切り上げにくい場合は、女性委員からそれとなく退出を促してもらえばありがたい」と述べた。



座談会では、実習についてのみならず、「厚生労働省管轄の看護学校と、文部科学省管轄の看護学部は、どこが違うのか」という質問も出された。

これに対して、堀教授は「高齢化の進行や日本の医療のあり方の変化のなかで、全国的に看護師の需要が増大しており、現在、看護職養成課程を持つ大学は200校以上にのぼっている。看護学校も看護学部も、基本的な学修内容は同じだが、看護学部は、将来の看護のあり方を見据え、創造力と想像力を備えた看護職像を考えるなど、理念を大切にして、技術偏重ではなく、人を理解できる看護職を育てたいと考えている」と述べるとともに、「看護学部に限らず、現在の日本の大学は、地域との連携を推進しており、本学も大学全体として、地域のなかで学生を育て、地域の活性化を地域の方々と一緒に考えることを重視している」と、大学と地域が連携する意義を語った。

また、会場からは「看護学部の教員は老人クラブをどう見ているのか。頼りないと思っているのではないのか」との率直な声も出された。これに対して、堀教授は「老人クラブの役員の方々は、年間の催事も多く、非常にお忙しいという印象がある。そういうなかで大変なご協力をいただいているのに、大学からお返しをする機会が少なかった。その一方で、連携を積み重ねることにより、

老人クラブの方が大学に来ることに少しずつ慣れてくたさって、大学と地域の方々との距離が縮まったのではないかと、この間の連携・交流の成果に触れた。

小野塚専任講師は、「頼りないと考えているなど、とんでもない話だ。そんなことはまったく思わない。実際、女性委員の方々には家庭訪問に多大なお力添えをいただいている。女性委員のみなさんがおられなければ家庭訪問への同行は実現しなかっただろう。緊急に訪問先の変更を強いられたときも、女性委員が臨機応変にアドバイスして下さる。これも人生経験を重ね、地域できちんと活動してきた人たちだからこそできることであって、とても頼りにしている」と、深い感謝を表明して、座談会を終えた。

## ■報告 II

### 「これからの橘の看護教育」

遠藤 俊子 (本学看護学部長)

本学が京都府内の私学で初めて看護学部を設置したのは2005年であるが、それから10年経った2015年4月には私学で7校、国公立を合わせると9校の看護学部が府内に存在することになる。

私どもはこの間、「地域の健康と看護学部の活動が一致するようにしたい」と考え、美化ウォーキング、体力測定、家庭訪問、健康教育などに取り組んできた。そのすべてに老人クラブの方々のご協力をいただき、私どもと一緒に学生を育ててくださったことに、心から感謝を申し上げたい。

先ほど、看護学校との違いについてご質問をいただいたが、看護学部は看護学という学問体系をベースに、看護師免許を有する人を育てるところなので、本学は、大学院に看護学研究科修士課程・博士課程を設置するとともに、認定看護師教育課程を持つ看護教育研修センターや看護異文化交流・社会連携推進センターを開設し、看護国際フォーラム、たちばな健康相談などを一体的に運営するように努めてきた。

看護は、くらしを見据えながら、人びとが健やかな年齢を重ねられるように見守る仕事であり、お風呂・トイレ・寝室など、生活の現場を見ることによって、くらしのあり方を考えるのが本来の看護職である。

その意味では、医学でも薬学でもない、看護学部としての役割を果たさなければいけない。学生のレベルでは問題発見まではできないが、看護異文化交流・社会連携推進センターでフォローできる仕組みをつくらなければいけないし、そこまで責任を持てるのが看護師という仕事である。そういう教えを、本日のみなさんのご意見やご質問からいただいたと思っている。

10年先の2025年には、京都市内においても高齢者人口が40%近くになると予想されている。今後、病院の在院日数はますます短縮され、在宅療養を促す動きがいつそう強まることを受けて、厚生労働省も「病院だけが看護師の働く場所ではない。地域の看護師を養成すべきだ」という方針を出している。

そういう状況のもとで本学は、プレナースである学生も含めて、地域を構成するメンバーの一員に加えていただくことで、地域の健康づくりに役立ちたいと考えている。また、未来の看護師を育てる教育活動に地域のみなさんが参加していただければ、こんなにうれしいことはない。

女性委員の方が、家庭訪問について「やっぱり仲間づくりが大切」と述べられたが、本学は「育ちあう、響きあう」を合い言葉に、「みんなで育てあい、響きあって、一緒に地域や大学をつくろう」と考えている。みなさんとの連携を、本学の教学理念である「自立・共生・臨床の知」を地でいけるような地域活動へと、ぜひ発展させたい。

文部科学省は、国の大学政策の基本方針である「大学ビジョン」のなかで、地域と大学の連携強化を謳い、地域再生の核となる大学作り（COC構想）を掲げているが、本学の看護学部は、地域のみなさんに支えられているという点で、その先端を走っていると思う。本日は、これからの10年の夢を私どもと一緒に描いてくださったことに厚くお礼を申し上げます。

(了)



懇親会

## 第5回橋セッション

# 地域連携センター 「醍醐中山団地分室」開設記念 ミニシンポジウム

### 報告 I

河股 智矩 Kawamata, Tomonori  
関西大学大学院理工学研究科環境都市工学専攻  
建築学分野博士課程前期課程 2 回生  
塚原 健司 Tsukahara, Kenji  
関西大学大学院理工学研究科環境都市工学専攻  
建築学分野博士課程前期課程 2 回生  
福岡 航 Fukuma, Wataru  
関西大学大学院理工学研究科環境都市工学専攻  
建築学分野博士課程前期課程 2 回生

### 報告 II

小林 大祐 Kobayashi, Daisuke  
京都文教大学総合社会学部専任講師

### 報告 III

都築 晃 Tsuzuki, Akira  
藤田保健衛生大学医療科学部講師  
地域包括ケア中核センター担当

### 報告 IV

篠原 誠一郎 Shinohara, Seiichiro  
京都市都市計画局住宅室住宅管理課担当課長補佐  
武藤 賢吾 Muto, Kengo  
本学学術振興課長

### 総合司会 & コーディネーター

小辻 寿規 Kotsuji, Hisanori  
本学現代ビジネス学部助教

地域との連携・交流企画「橋セッション」の5回目は、「団地と大学の連携」をテーマに、6月10日（水）、本学管理棟第2会議室にて開催された。今回は、本学地域連携センターの「醍醐中山団地分室」開設を記念し、本学を含む4つの大学から、団地との連携事例について報告を受けた。

### ■報告 I

## 「団地再編におけるコミュニティ拠点 『だんだんテラス』」

河股 智矩、塚原 健司、福岡 航

(関西大学大学院理工学研究科環境都市工学専攻建築学分野博士課程前期課程 2 回生)

### みんなが気軽に集まれる場所を

私たちは2012年4月から、京都府八幡市の男山団地を研究対象に調査を開始し、アンケートやワークショップを通じて、男山団地再編について住民との意見交換をおこなった。そこで寄せられた「設備が古い」「みんなが気軽に集まれる場がない」等の声をもとに、私たちは「空き店舗を活用したコミュニティ拠点の整備」を提案した。

この取り組みを進めるために、京都府、八幡市、関西大学、UR都市機構（以下、UR）で連携協議会を設置し、2013年には、府知事立ち会いのもと、八幡市、関西大学、URの3者で「男山地域まちづくり連携協定」を締結した。ここから、コミュニティ拠点「だんだんテラス」開設に向けて大きく動き始めた。

### 365日オープンコミュニティ拠点

#### 「だんだんテラス」誕生！

「だんだんテラス」は、学生が建築学の専門性を活かして、団地中央部に位置する中央センター商店街の空き店舗を改装したコミュニティ拠点。住民が気軽に立ち寄れるようにとの意図から、靴を脱いで上がるのではなく土足のまま入れるタイプにしたのが設計のポイントである。2013年11月にオープンした「だんだんテラス」は、元旦や夏休みも含めて365日、学生が大学から通い、10時から18時まで開いている。

2014年には、3者に団地自治会と商店会が加わり、「だんだんテラスの会」を結成して、地元農家と協力した朝

市、ラジオ体操、部屋の整理整頓を目的としたフリーマーケット、各種講座、昼間は来れない層を対象にしたバー、屋外空間の活用を目的とした「流しそうめん」など、多彩な催しを展開している。

また、団地全戸配布の月刊「だんだん通信」による情報発信、中央センターから離れた北部や南部の住区に出かけていく「出張だんだんテラス」、団地内の自然豊かな緑道を活かした「緑道マルシェ」や「緑道ピクニック」、ワークショップ形式で住民自身がイスづくりやクロス貼りに挑戦するDIYラボ、子どもたちをまきこんだ団地積み木、スロープの塗り絵、駐車場を活用したカーシェアリングの社会実験もおこなっている。

「だんだんテラス」運営の連携体制としては、関西大学団地再編プロジェクトが人材と研究を提供し、家賃を半額、大学と団地間の学生の交通費を拠出するほか、URは家賃を半額免除し、八幡市は施設経費（主に光熱費）を負担し、京都府は活動費の補助をしている。これらの連携によって365日オープンが可能になった。

## ■報告 II

### 「京都文教マイタウンMJ」～向島ニュータウン、京都文教大学と団地住民のまちづくり」

小林 大祐（京都文教大学総合社会学部専任講師）

#### 向島ニュータウンの状況

“京都文教マイタウン向島”（以下、MJ）は、向島ニュータウンのまちづくりの拠点となることを目的に、2013年1月、団地内商店街の、かつて幼児向け英会話教室だった場所に設置された。ちなみに“MJ”とは、団地で生まれ育ったラッパーたちが、愛するふるさと「向島」につけた愛称である。

向島ニュータウンは、京都市伏見区向島にある6300戸の大規模団地で、団地内に3つの小学校があり、2つの中学校区に分かれている。1977年に入居が始まり、現在の入居数は6000戸弱。住居棟は、低層分譲、高層分譲、高層公団賃貸、高層市営に分かれ、特に市営住宅は中国系住民（中国帰国者とその縁者）が多い。福島原発事故の避難者も住んでいる。

当団地は、全世帯の10.7%が高齢単身世帯で、世帯主の48%が65歳以上、学齢期の子どもゼロ世帯が

52%と、高齢化・少子化が進み、建物の老朽化や設備の陳腐化といった問題を抱えている。



会場の様子

#### MJは多彩なプロジェクトを生みだすコミュニティ拠点

2005年、近鉄向島駅前への葬儀場進出反対運動をきっかけに、住民がまちづくり協議会を設立したのがMJの萌芽となる。本学の学生がこれに参加し、住民の自主的な取り組みを呼びかけて、2008年に“向島駅前春の祭典”を開き、2010年からは同じく“秋の祭典”を開いている。これはプレMJとも言うべき取り組みで、障害者支援施設のフリーマーケットや、向島地域の病院の協力による健康診断なども行われ、こうした取り組みで培われた住民と本学の連携・交流をもとにMJが誕生した。

MJは、何らかのプロジェクトを立ち上げたい人が、“この指とまれ”方式で手を挙げて、仲間を募り、その活動に利用する空間である。常駐するスタッフはおらず、各プロジェクトが利用するたびに開ける。

MJの運営は、本学ニュータウン研究会、本学ワールドリサーチオフィス（地域連携の窓口）、京都市住宅供給公社、向島二の丸・二の丸北あんしんネットワーク（学区社会福祉協議会と自治会・消防署・地域包括支援センター・障がい者生活支援センター・各種団体連絡協議会・大学等が連携し、地域の安全・安心の確保に取り組む仕組み）、住民ボランティアグループで構成する運営会議が責任を持っている。運営会議は、各自、自分の飲み物と食べ物を買込み、床に座っての乾杯から始まり、各プロジェクトの翌月の利用予定を確認・調整する。

MJの運営経費は、京都市住宅供給公社が提供する家賃・光熱費と商店会からの会費の免除、各プロジェクトから徴収する月500円の会費でまかなっている。大

学からは人的支援のみで、補助金は一切もらっていない。補助金をもらうと、補助金の切れ目が活動の切れ目になり、継続が難しいので、最初から補助金はないという前提で活動している。

### ■報告 III

## 「藤田保健衛生大学と豊明団地との連携について」

都築 晃（藤田保健衛生大学医療科学部講師、地域包括ケア中核センター担当）

### 医療の側面から団地の課題解決に貢献

豊明団地は、1970年代初頭に完成した。55棟があり、すべて5階建てで、エレベーターがあるのは2棟のみである。世帯数は約2000、居住者は約4500人うち外国人が1000人以上である。65歳以上の独居高齢者は、豊明市平均が6%であるのに対して、豊明団地は25%と高率で、4～5階の住戸は空室が目立つ。今後、老老世帯・独居世帯の増加が予想され、対応策を確立することが急務となっている。

本学は、こうした地域の課題解決に医療の側面から貢献することをめざして、2014年に藤田学園・豊明市・URの3者による包括協定を締結し、豊明市との共同事業として地域包括ケアモデル事業をおこない、その中で体操教室や体力測定、団地周辺ウォーキングマップ作成などの取り組みをおこなった。

豊明市という行政が参加することで、広報力が強化でき、「大学が自ら地域貢献のためにやるのだ」という立場と住民の信頼を得ることができた。

こうした活動を経て今年4月、学生16人と教員2人の団地入居を開始した。私も入居した教員の1人である。学生・職員の居室は、2DK～3DKで、家賃はURの各種割引制度を利用して約3万円からである。居室ごとの契約なので大学は空き室リスクを負わない。学生の居住条件は地域活動への参加であり、入居から、団地内運動会、災害時炊き出し訓練、清掃活動に参加し、住民との交流が次第に増えている。6月末には独居高齢者とのふれあい会食もあり、来年以降も入居者を増やし将来的には60～80人前後が常に団地内に居住しながら地域貢献する形を目指している。

### 活動拠点は「ふじたまちかど保健室」

団地での私たちの活動拠点は、今年4月に開設した「ふじたまちかど保健室」（以下、保健室）である。開室は週5日、10～15時まで常時医療介護の専門資格を持つスタッフが対応する。中心事業は健康や医療介護に関する無料相談である。毎日、健康に関するミニ講座を行い、本学学生の在宅医療の実習拠点としても活用している。スタッフは、看護師、保健師、理学・作業療法士、薬剤師、ケアマネジャーなど、すべて地域包括ケア中核センターの業務を兼任する本学教員である。

保健室の利用実績は、オープンから1カ月で来室者343人、健康教室等参加者170人となっている。個別相談では、健康不安に関する相談が8割を占め、市外からの電話相談もある。団地内では、幻覚による問題行動に苦しんでいた精神疾患患者が、保健室を利用することで穏やかに過ごせるようになり、周辺の住民から感謝の声が寄せられている。

こうした本学の地域連携の取り組みは、いくつかの新聞やテレビで紹介された。補助金ゼロでも運営できるような仕組みとしており、大学、UR、豊明市、住民が皆で協力して、地域との連携・地域貢献を継続してゆきたい。

### ■報告 IV - ①

## 「大学生の手による コミュニティ・エンパワーメント」

篠原 誠一郎（京都市都市計画局住宅室住宅管理課担当課長補佐）

京都市は2012年4月、地域コミュニティ活性化条例の施行と、「区民提案・共汗型まちづくり支援事業予算」の創設により、「大学のまち・学生のまち」の強みを活かし、大学の教育・研究成果や学生の活力が地域の課題解決や活性化につながることをめざして、取り組みを進めてきた。

市営住宅の高齢化率は京都市平均よりも高いという状況のもと、同年、団地自治会を対象にアンケート調査を実施した。その結果、自治会の後継者不足やイベント参加率の低下など、コミュニティを維持することの困難さを指摘する声が多く寄せられたことを受け、醍醐中山団地でも自治会執行部と話し合いを持った。

この時点で、すでに醍醐中山団地の自治会は積極的な

活動を展開し、京都橘大学も山科区役所と地域連携包括協定を締結して、さまざまな活動を展開されていたので、お互いに「Win × Win」の関係が構築できないだろうかと考え、2013年12月、京都市は京都橘大学に協力を要請した。

つまり、学生が団地に入居することにより、学生は低廉な家賃で住まいを確保でき、まちづくり活動の実践もできる、大学にとっては学生の住まいを確保でき、地域貢献をアピールできる、地元は若い世代の入居による団地の活性化、自治会活動の担い手確保、防犯性向上や高齢者の見守りが期待できる、京都市にとっては市営住宅の空室活用と留学生の居住支援にもなるなど、各関係者の利害が一致すると考えたのである。

ただし、公営住宅の建設費用は国と市が折半していることもあり、公営住宅法の山を越えるのは大変で、国と何度も折衝を重ねた。団地住民の間にも、「若者が入ってきたら騒音などで住環境が乱れるのではないか」といった不安と反発があり、地元説明会や個別訪問も含めて、誠意をもって説明を尽くした。その結果、住民・自治会とも納得と合意を得ることができ、今年4月、団地内に京都橘大学地域連携センター「醍醐中山団地分室」と「国際シェアルーム」のオープンを迎えた。

学生が入居し、ルームシェアリングしているのは、2世帯住宅仕様の「親子ペア住宅」である。今回、京都橘大学が住宅の改装費全額を負担され、この取り組みの大きな原動力となっている。今後、醍醐地域には大学がないので、分室の開設を機に、醍醐地域での京都橘大学との連携を深め発展させていきたい。

## ■報告Ⅳ－②

### 「京都橘大学と醍醐中山団地との連携について」

武藤 賢吾（本学学術振興課長）

#### 醍醐中山団地における連携

京都市営醍醐中山団地は、本学の南南東に位置し、直線距離は約2kmである。管理戸数762戸、入居戸数644戸。市営住宅92箇所のうち、高齢入居者数は6位、高齢単身世帯数は10位、高齢者を含む世帯数は6位と、いずれも上位を占めている。

醍醐中山団地での連携は、本学にとっては教育と地域貢献のフィールドが得られ、市側にとっては空室対策と団地活性化が期待できるといった利点があったので、京都市の呼びかけに応えることにした。

具体的には、京都市から団地1階部分の「親子ペア住宅」4セットの無償提供を受け、大学がその改装費の全額を負担して、1セットを本学の地域連携センター「醍醐中山団地分室」に、3セットを日本人学生と留学生が住む「国際シェアルーム」に活用している。昭和50年竣工で、かなり老朽化しているが、周辺は静かで、学習環境は抜群である。改修は本学の建築学科の教員が設計を担当し、ハイセンスな居室に生まれ変わった。

#### 学生は住民に鍛えられ、住民は学生との交流で元気になる

この取り組みで本学がねらったのは、以下の2つである。

##### ①国際理解教育と、地域で“鍛えられる”教育システム

本学の学生を入居させて、実社会のなかで育ててもらおう。住民に教育され、鍛えられるなかで、学生が団地住民としてのルールを学び、社会人として旅立っていくための教育システム。したがって、それを超えた任務（高齢者支援など）を最初から負わせない。まず団地住民としての義務を果たすなかで、住民と交流し、溶け込み、成長しながら活動を広げることがねらい。

##### ②醍醐地域における地域連携拠点

分室は、団地に限らず、醍醐地域全体に向けた連携拠点（接触窓口）であり、学生ボランティアの活躍の場（運動会、子ども会、健康相談、救命講習、子育て支援など）としても活用する。

①と②は、当面は別々のものとして捉え、入居学生を地域連携活動に義務として参加させることはしない。分室には、入居学生ではなく本学の学生が出かけて活動する。それを出発点に、だんだん両者が接近・融合することをめざしている。

先日、分室で看護学部教員・学生ボランティアによる健康相談を実施した。児童教育学科の学生ボランティアは団地子ども会の行事を手伝い、入居学生は住民との交流会や草引き清掃などに参加している。

4月にオープンしたばかりなので、実績はほとんどない。他大学の優れた活動実績から学んで、今後の活動に活かしたい。醍醐中山団地での活動を充実させるため、学内教職員の協力を切に願っている。

## 京都モダニズム建築を訪ねて 第17回\*

\*文化政策研究センター広報誌「News Letter」からの連載回数を引き継いでいる

# 京都市立日吉ヶ丘高等学校

河野 良平 Kohno, Ryohei

本学現代ビジネス学部准教授

数年前、模擬授業を行うため「京都市立日吉ヶ丘高等学校」(1967)に来たことがあったのだが、そのときこの高校が建築家・堀口捨己(1895～1984)の設計とは全く知らなかった。ただ、実際に授業をしてみて感じたことは、教室の広さに対して天井の高さがピッタリと合っていて、非常に居心地のいい空間であるということだった。1つの教室の大きさは幅7m、奥行き9mで、天井高さは実際に測ってみると3.5mであった(当時の図面を見ると、教室の天井高さは3.3mになっている。写真1)。校舎は鉄筋コンクリート造の4階建てで、平面は東西66m南北9.5mの細長い形をしており、上記の教室が各階に6つ並べられる大きさである。各階の両サイドには階段があり、教室の南側は大きな開口部、北側は幅2.5mの廊下が付いている。この北側廊下の天



写真1：教室内観。南側に大きな開口部があり非常に明るい。現在改装工事中で、床から鉄筋の出ているところにもともと壁があった。(近藤先生撮影)



写真2：南側外観。水平線を強調したシンメトリーな立面構成。校舎上部左端に螺旋階段が見える。(筆者撮影)

井高さは2.4mになっていて、廊下をしばらく歩いた後に教室へ入ると、明るく広々とした印象になるのではないかと想像される。竣工当時の1階には保健室、家庭科関係の教室や理科生物教室が、2階には事務室、校長室、応接室、職員室があり、3・4階には普通教室や図書室が配置されていた。敷地は東福寺にほど近く、西側の正門を入ると敷地に沿って南側へ回り込むように長いスロープが設けられ、そのスロープを上りきると目の前に校舎の南側ファサードが現れる(写真2)。上述のように東西に長い立面なのだが、それはシンメトリーの構成になっていて、2階の中央部にバルコニーが付いている。出窓ようになった開口部が横長の立面を強調しているが、当時の写真には北側の中央部に高い時計塔が写っており、全体のバランスを整えていた。また、東西の

上端角部には屋上へつながる小さな螺旋階段が設置されていて、くるくるとショートパスタのようにねじれ上がった曲面が立面上のアクセントになっている。

この高校は何度か増築を行っており、この鉄筋コンクリート造の校舎は第4期増築工事にあたる。もともと京都府画学校として明治13年(1880)に開校し、昭和24年(1949)に「京都市立日吉ヶ丘高等学校」と改称、昭和27年(1952)に現在の泉涌寺山内町へ移転した。堀口は当初から設計に関わっており、最初で



写真3:茶室内観。炉(写真に写っていないが画像左下の方にある)と床の間の配置に対する、茶道口と客口の位置が特徴的。(筆者撮影)

きた木造の実習棟2棟(1951)は堀口の設計によるものである。また、この木造校舎が取り壊される際、当時の教諭で彫刻家の藤庭賢一氏らが市の教育委員会に陳情し、木造校舎内にあった「雲岫席<sup>うんしゅうせき</sup>」という茶室を校地内に建てたプレファブ平屋の建物内に移築し、現在まで保存されている(写真3)。堀口は日本の近代における代表的な建築家であるが、茶室の研究者としても知られている。ちなみに、今回の取材に同行してもらった本学の近藤康子先生は堀口の設計した茶室を研究されているので、興味のある方はお話を伺ってみるといいかも知れない。近藤先生によるとこの茶室の平面には、なぜそうなっているのかまだよく分からない部分があるそうです。

堀口は明治28年(1895)岐阜県本巣郡にある旧家の大地主の家に五男として生まれた。小さい頃から絵画

やお茶に親しむが、本人は自分の名前に複雑な思いを持っていたようである。「おれの名前はステミ。いっぱい子供がいて、おれは終わり頃できて、もう要らないというのでつけられた名前だ<sup>1</sup>」と言ったそうだ。そんな堀口の名前が建築史の中で最初に出てくるのは、東大卒業時に結成した分離派建築会の創立メンバーとしてである。当時東大では構造派の勢力が強く、デザインを志向する学生たちは肩身の狭い思いをしていたようだ。建築における芸術的な側面に可能性を見出そうとしていた堀口は、その作品や思想で分離派の先頭に立っていた。東大卒業後は在野の建築家として活躍し、「大島測候所」(1938)や「若狭邸」(1939)といったモダニズム的な作品を発表する一方、「八勝館 御幸の間」(1950)や「大原山荘」(1968)のような和風の作品も手掛けた。これらの作風の違いは矛盾している訳ではなく、一人の建築家によって異なる条件から導き出された結果であると考えた方が自然であろう。

地域における学校施設の役割から考えれば、しっかりと安定した外観デザインと構造が選択されたと理解できるし、利用者の立場から考えれば歴史や伝統を学び明るく楽しい学校生活の行える場を提供しようとしたであろう。教育や施設管理の面からすればシンプルかつ合理的な建築計画や配置として、堀口の思想が具現化されている。建築に対する幅広い知識、豊かな経験と深い思索に保証されたこの円熟期の作品からは、単なるモダニズムや伝統理解といったものを越える新しい枠組みや堀口の見ていた建築の持つもっと別の重要な側面について思いを巡らしてみる必要性が感じられる。

#### 参考図書

「京都市日吉ヶ丘高等学校」1953 建築と社会9月号  
村松貞次郎・山口廣・山本学治編 近代建築史概説 1978  
堀口捨己の「日本」空間構成による美の世界 1996 建築文化8月号別冊  
京都市立日吉ヶ丘高等学校 要覧 2014(同校HPも参照した)

<sup>1</sup> 神代雄一郎・磯崎新、「巻頭対談 『赤物』堀口捨己の視座」、前掲書、1996、p.9

## 「山科砥之粉」は伝統産業の縁の下のチカラ持ち

国内唯一の砥之粉づくりを次世代に手渡したい

ゲスト

進藤 謙二 Shindo, Kenji

株式会社進藤謙商店代表取締役

聞き手

倉持 祐二 Kuramochi, Yuji

本学人間発達学部教授



倉持教授（左）、進藤氏（右）

### 木工芸がある限り、砥之粉は必需品

倉持 昨年、進藤さんを大学にお招きして、授業で講話をしていただいたとき、「国内で砥之粉を生産しているのは唯一、進藤謙商店だけだ」という話を聞いて、学生はびっくりしていました。

進藤 そうですか（笑）。砥之粉そのものも、いまの若い方にはなじみが薄いでしょうね。私の子どもの頃は、学校で1枚の板をもらって、自分で考えて、切って、釘を打って…というのをやった覚えがありますし、小中学校の教材用に砥之粉を出荷していました。本立てや椅子を作る教材として使われていたのですが、20年ほど前からほとんど使われなくなったんです。

倉持 以前の中学校の「技術・家庭科」の授業は男女別で、男子は「技術科」で木工などを学び、女子は「家庭科」で家庭分野を学んでいたのですが、いまは男女共学で、男子も調理実習などをするようになりました。その影響があるのと、のぎりを持たせるのが危険だという懸念もあるのかもしれませんが。

ところで、講話では、砥之粉は風化した岩石を粉末に加工したもので、風化の度合いによって色が変わり、赤砥之粉、黄砥之粉、白砥之粉ができるかと教えていただきました。原料の岩石は、どこの山から採掘するのですか。

進藤 いまは主に稲荷山です。ここから少し坂を登ったところにある山がそうです。もともと山科は三方を山に囲まれていて、この地域全体が山裾みたいなものですから、昔はいたるところで採っていて、四宮のほうでも採掘していたと聞いています。

倉持 岩石の採取場所によって、砥之粉の色が変わるのですか。

進藤 赤砥之粉が採れるのは尾根のほうで、黄砥之粉と白砥之粉は、それより少し下った中腹ぐらいです。でも、

Interview

成分や材質は、赤も黄も白もほとんど同じです。

**倉持** では、用途によって色を使い分けるのですか。

**進藤** どの色もなめらかな仕上げにするのに使いますが、赤砥之粉は、漆塗りの下地や木製品の目止め、つまり木地に砥之粉を塗り込んで目をふさぎ、漆を塗りやすくするのに使います。漆器などの下地は、次々に塗り重ねていくので、最初に塗る砥之粉の色が濃くてもかまわないわけです。ところが、桐タンスなどは、見た目の色が変色すると具合が悪いので、板にいちばん近い色の砥之粉ということで、黄砥之粉を使います。白砥之粉は、白木の手垢防止用や目止めとして、建築用の柱の塗装に使われることが多いですね。こういう用途からもわかるように、砥之粉は木工芸の必需品だといわれています。

**倉持** なぜ「砥之粉」と呼ぶのかも、興味があるのですが。

**進藤** 鳴滝砥石という京都の名産品がありますが、砥石の成分とよく似ているから「砥石」から「砥之粉」になったと聞いています。

## 暮らしの変化と、砥之粉生産の変化

**倉持** 創業90年ということですが、進藤さんは何代目ですか。

**進藤** 初代から数えると4代目ですが、初代はほんの短期間だったので実質的には3代目です。

**倉持** 最近では砥之粉の出荷量が減っていると聞きました。

**進藤** 最盛期の昭和30年代から40年代にかけては、木工だけでなくレコード盤や自動車の塗装の下地にも使われていたので、当時の国鉄山科駅の左側に専用の「砥之粉列車」のターミナルがあったほどですが、いまはレコード盤はCDになり、自動車のほうは化学塗料になりました。意外なところでは化粧品のファンデーションにも入っていましたが、いまは使われていないようです。

木工にしても、いまの新築の家で柱が見えることはほとんどなくて、たいてい合板で囲まれているでしょう？

日本の本物の木材が使われなくなったことも、砥之粉の出荷が減っている一因です。

**倉持** お椀なども、近頃は大量生産されたプラスチック製の漆器がお店に並んでいます。

**進藤** そういうものには、たぶん砥之粉は使われていません。昔はどこの家にも本物の漆塗りのお椀やお盆がありました。いまはお正月のお雑煮や重箱に使うぐらい

で、それさえプラスチック製だったりします。日本の暮らしもだんだん変わってきたのかなと思います。

**倉持** そういえば子どもの頃、法事などで人が集まるときは、必ず蔵から食器をたくさん出してきたのを覚えています。住まいも含めた生活様式の変化が、砥之粉の需要の減少につながっているんですね。

**進藤** そう思います。地元の小学生が、地域の産業を学ぶ授業でうちの工場に見学に来てくれるのですが、一所懸命、砥之粉のことを説明しても、なかなか伝わらない。なぜかというと、子どもたちはふだん、塗りのお椀やお仏壇を目にすることが少ない。そういうものを置いている家がけっこうあるんです。

**倉持** たしかにマンションなどでは仏壇のない家も珍しくありません。

**進藤** 襖の把手や外枠といった黒い塗りの部分にも砥之粉が使われていますが、襖もいまどきのハイカラな家には少ないですからね。

ただ、最近、テレビドラマで輪島の塗師屋が舞台になりました。視聴率の高い番組で取り上げられると、漆器も見直されるのではないかと期待しています。砥之粉よりも粗い「地之粉」というものがあるって、輪島の漆器には「輪島地之粉」の上に砥之粉を塗るのですが、その砥之粉は「山科砥之粉」で、昔から輪島の漆器組合に出荷しているんです。

## 山科の地場産業としての砥之粉づくり

**倉持** 山科地域の人びとにとって、砥之粉はどういう存在なのでしょう。

**進藤** 砥之粉をたくさん出荷していた頃は、砥之粉屋が30軒ぐらいあって、この辺り一帯を歩けば、どこでも砥之粉を団子状に丸めて柵板で天日干しする風景が広がっていました。特に西野山や勸修寺地域では、かなりの方々が砥之粉に関わっておられたと思います。というのは、工場で働くだけでなく、山から石を運び出すのに牛を使っていて、牛車を扱う専門の人もいたんです。いまでも、うちに牛車の車輪が残っていますが、子どもの頃、そういう人がいたのをうっすら覚えています。

まだ電気もない時代は、水を動力にしていたから、水の流れが必要だということで、砥之粉業者はだんだん山手のほうに集まってきたのかなと思います。水車を利用

した名残の、「<sup>どんつき</sup>胴搗」という石が、うちにも1つだけ残っていますよ。

砥之粉を乾燥させるのも、いまはリフトで棚に載せて乾かしますが、昔は天日干しで、雨が降ったらあわてて取り込まないといけない。機械化する前は、何をすることも人手が要りましたから、うちでも家族以外に10人以上の人を雇っていましたし、砥之粉屋の従業員の福利厚生でレクリエーションに行くときなど、バスを2台も連ねて行きました。それぐらい働いている人が多かったんです。

**倉持** 地形という意味でも、山科で砥之粉産業が栄える要因があったし、雇用の面でも山科での存在感が大きかったんですね。

**進藤** それがいまでは、出荷量が減り、仕事も機械化されて、家族だけでやるようになりました。

**倉持** 砥之粉の生産は、家族だけでできるのですか。

**進藤** 必ず要るのは2人ですが、3人いれば、かなりのことができます。うちは幸いなことに息子が跡を継いでくれますが、私ら夫婦がいなくなって、息子1人になったら、やっぱり難しい。機械化したとはいえ1人では難しいし、かといって人件費を出すと採算が合わない。なかなか悩みどころです。

しばらく前に、もう1軒残っていた砥之粉屋さんが廃業されて、うち1軒になったとき、得意先の漆屋さんに「競合相手がなくなったのだから、もう少し値段を上げてもいいのでは」と言われたのですが、どの得意さんも長いお付き合いなので、なかなか踏み切れません。漆は少量でも高価ですが、砥之粉は安く、砥之粉業者が多かった時代のままの値段で売っています。

## 伝統的用途と、新しい顧客層と

**倉持** 砥之粉の新しい販路の開拓は？

**進藤** 息子がホームページをつくったところ、けっこう反響があって、驚いています。最初は砥之粉のことを少しでも知っていただけたらいいと思って、紹介記事のみで販売はしていなかったのですが、それを見て「分けてもらえないか」とおっしゃる方が増えてきました。それでも初めはお客さんのお近くの販売店を紹介するにとどめていたのですが、うちで直接販売したほうがお客さんにとっても便利かなと思って、注文ページをつくりました。

ネット販売は、何らかのかたちで砥之粉に関わっていたり、ホームページで砥之粉のことを知って、納得済みで注文してくださる方がほとんどですし、代金の授受は運送屋さんがやってくれるので、トラブルありません。日曜大工用など、小口のお客さんが多いので、漆屋さんに直接卸すのに比べると規模は小さいのですが、いままで取引のなかった新しいお客さんからの引き合いが増えています。

**倉持** 日本で砥之粉をつくっている人は進藤さんしかいないと聞いて、学生は「大丈夫ですか」と心配していました（笑）。山科の地場産業、伝統産業ですから、なんとか残ってほしいと思います。

**進藤** ありがとうございます。私も、「文化財の修復には砥之粉がないとあかん。絶対、やめんといてや」とよく言われるんです。たしかに京都には文化財が多くて、先日西本願寺に入っている漆器屋さんから注文がありました。京都には塗器屋さんも多いのですが、東日本大震災の後には東北地方にも仕事に行っておられるので、そこに送ることもあります。お寺の修復などは、何カ月もかかりますし、砥之粉を使う量も多いので。

それから、南座に入っておられる有名な化粧師の方も「砥之粉が必要なんです」とおっしゃいますし、もう亡くなられましたが、陶芸家で人間国宝の近藤悠三先生は、この近所に住んでおられたので、ぶらっと散歩の帰りに寄られては、「砥之粉は、鉄分もけっこう入っているの、おもしろいものができる」とおっしゃっていました。

うちが廃業したらえらいことになると言われていたのが、息子に「昔からのお得意さんも、ネットのお客さん



砥之粉の製造過程



進藤 謙二

1949年、山科西野山にて誕生。京都産業大学経営学部卒業後、家業の砥之粉屋（株式会社進藤謙商店）の4代目を継ぐ。現在、日本で唯一の砥之粉製造販売を担っている。地元の小学校からの地元産業学習の受け入れにも協力。一般団体にも所属し、地元の山科消防団の副団長、地元の寺社の総代も務める。趣味はゴルフ。

も、一所懸命に守っていかう」と話しているのですが、砥之粉の製造には、それなりの広さが必要でね。地価が上がると固定資産税もかかるので、結局、昔の砥之粉工場はマンションやガレージに変わりました。採算さえ合えば、当然、跡継ぎもできるし、誰かが引き継いでくれると思うので、採算を考えながら、なんとか残していきたいと思っています。

## 砥之粉づくりも、地域づくりも、大切にしたい

倉持 進藤さんは消防団の活動にも参加されています。

進藤 私が入ってから、もう40年以上になります。地元の百々地域の分団長を10年やらせていただいて、いまは山科全体をまとめる本団の副団長をしています。今年は8月末に京都市の大規模な防災訓練が山科区で行われましたが、京都橘大学の先生方や学生さんには防災訓練も含めて、いろいろなことに協力していただいて、ありがとうございました。

倉持 いいえ、こちらこそ地域のみなさんに学生を育てていただいて、うれしく思っています。「地域志向の大学」を標榜する本学としては、少しでも地域のみなさんに喜んでいただけたら幸いです。

ところで、今年は時代祭の行列にも出られるとか。

進藤 世話人の方から、信長役に馬に乗るようになっていきます。時代祭の織田公上洛列の出演者は、毎年、山科区・東山区・中京と下京区の一部の持ち回りで、今年は山科区の当番だそうです。それで山科区から信長や秀吉など6人の武将役を出さなくてはいけなくて、なぜか私が信長をやることになりました（笑）。

武将のお付きの侍は、山科区の各学区ごとに人数の割当があるようで、ものすごい人が必要です。馬も、どんな馬でもいいわけではないので、近辺だけでは用意できず、日本全国から運んでくるのですが、なにせ生き物で

すから、長時間、狭い運搬車に閉じ込められたらストレスがたまって、暴れたり座り込んだりする。それをお世話する専門の人もおられるようです。

倉持 そうすると関係者の数は膨大になりますね。伝統というものは、そういうエネルギーの集積があってこそ守られるのかもしれない。

もしや、その髭も信長の…?

進藤 そうなんです。信長役に決まってから伸ばし始めました。文献によると信長の髭はもっと細かったようですが、私自身もすごく違和感があります（笑）。3時間半も馬に乗ったままというのも、お尻が痛くなりそうで、いまから思いやられて…。寄り合いやら、乗馬の練習やら、この頃はバタバタしています。

倉持 大変だと思いますが、落馬だけは気をつけてください（笑）。

進藤 世話人の方からも「体調管理に気をつけるように」と言われているのですが、根がおっちょこちょいなので、よくケガをするんです（笑）。でも、京都の一大行事なので、砥之粉の仕事同様、頑張ります。

（了）



## 地域で働く人と出会う

私の山科砥之粉との出会いは3年前になる。小学校社会科の授業づくりをテーマにした講義の中で、グループごとに教材を選び、指導案を書き、模擬授業を実際に試みるという課題に取り組みさせた。あるグループは、地域産業を通して山科地域をとらえさせるという設定で、砥之粉づくりをしている進藤謙二さんに取材を申し込み、教えてもらったことをもとにして指導案をつくった。そして、作成した指導案をもとに、子ども役の学生を設定しての模擬授業に取り組んだ。「この粉は何でしょう。」という教師役の学生の問いかけに、「きな粉かなあ」と言って食べようとする学生がいたことを覚えている。

思えば、今から25年ほど前までは、図工の時間に本箱の仕上げとして、砥之粉やニスを塗ったりしていた。当時は、小学生でも砥之粉の使い方は理解していたと思う。ところが、学校教育の中から砥之粉の使用が消え、日常生活の中でも漆器などが使われなくなった今、砥之粉とのつながりは希薄になってしまった。

そんな砥之粉だが、日本全国で進藤さんしか生産していないというのだから驚きである。たとえ砥之粉が私たちの目に触れなくなっても、漆塗りや文化財の修復などには欠かせない代物である。最近では、日本だけでなく、中国からの山科砥之粉の注文もあるという。

昨年度、進藤さんには、山科の砥之粉についての講演をお願いした。学生の感想には、日本でただ一つ砥之粉

を生産しつづけている進藤さんの姿に対する思いが綴られていた。

「今日初めて砥之粉という言葉を知りました。最初は全然聞きなれない言葉で、なかなか想像ができませんでしたが、でも、実際に砥之粉の原料と砥之粉を持ってきていただいて、目で見て手に触れることによって理解することができました。

日本で唯一砥之粉づくりをしていると聞いて、やめようと思ったりしなかったのかと思いました。進藤さんがやめると、文化財の修復に使っている砥之粉が日本になくなるということだとわかりました。そうすると、文化財の修復のためには外国から砥之粉を輸入することになり、修復費が高くなったりするのかと思いました。外国でも砥之粉を作っているところは多いのかと思いました。外国の製品にたよらずに、進藤さんのところで代々続けていってほしいと思いました。」

地域で生きて働く進藤さんとの出会いは、地域との具体的ななかかわりを生み出し、自分なりの地域像を描いていく出発点になった。さらに、地域の現状をつかんでいくことで、学生自身が日本や世界の動きに目を広げていくきっかけにもなることだろう。 (倉持 祐二)

